

2015年度第1回教養文化研究所主催公開講演会報告

教養文化研究所所長 廣野 行雄

実施日時：6月9日（火）13:30～15:00

講師：Paul. F. McCarthy（ポール・マッカーシー）氏

題目：日本文学との出逢い

場所：駿河台大学7405教室（第2講義棟4階）

それでは、時間になりましたので、教養文化研究所主催の講演会を始めさせていただきます。私、教養文化研究所の所長を務めております、廣野と申します。

本日の講演者でいらっしゃいますマッカーシー先生は、つい先年まで、20年以上本学で教鞭をお執りになっていらっしゃいました。今日、ここにおいでの方の一般市民の方の中には、先生のことを覚えていらっしゃる方もあるいはおありかと思えます。その方が身近にいらっしゃらなくなったときに、その方の真価というのでしょうか、そういうものが身にしみて分かるということがありますが、私、先生が退職なさってからの数年間、新任教員の人事などに携わるときに、今更のようにマッカーシー先生、日本語の運用能力といい、学識の深さといい、得難い方だったんだというふうに痛感させられました。そういうわけで、ぜひとももう一度先生のお話を伺いたいということで、本日、講演会に講師としてお招きしたわけです。先生のご経歴につきましては、このあとの講演の内容と重なると思いますので、ここで触れることは差し控えていただきたいと思います。

人というものは、自分の顔や姿というものを、直接自分の目で見ることではできません。それを映

し出す鏡が必要になります。朝、顔を洗ったときなど、鏡の中に自分の顔が映ってるはずですけども、そこに父親や母親の顔を見いだしてはつとすようなことがありますし、それから、写真や動画の撮影を見ていると、自分の姿や声がイメージどおりでなくてびっくりするというような、そういう経験をお持ちの方も少なくないと思います。日本文化の中に暮らしている私たちは、自分たちの文化というものについて、無頓着に暮らしています。そのくせ、日本文化という、ある種のできあいのイメージを共有してののではないのでしょうか。今日はマッカーシー先生に、われわれが自分たちの文化とか文学を見つめ直し、再発見するための鏡になっていただきたいというふうに思っております。

しかし、そのようなしかつめらしい理屈は抜きにしても、ハワイやカルフォルニアのような一定の日本人コミュニティが存在するところと違って、ほとんど日本との接点がないミネソタという地域の1人の少年が、どのようにして日本文化に出会い、そして、そこをついの住みかとするほどに魅せられたのかというお話は、私でなくても、皆さん興味がおありになるのではないかと思っております。それでは、マッカーシー先生、よろしくお願いいたします。